

## 木村俊道著『文明の作法：初期近代イングランドにおける政治と社交』

白川，俊介  
日本学術振興会特別研究員

<https://doi.org/10.15017/22991>

---

出版情報：政治研究. 58, pp.181-183, 2011-03-31. 九州大学法学部政治研究室  
バージョン：  
権利関係：

木村俊道著

『文明の作法―初期近代イングランドにおける政治と社交―』(MINERVA 西洋史ライブラリー<sup>86</sup>)

(ミネルヴァ書房、二〇一〇年、x+二七三十五〇頁)

本書は、「文明」とは何か、あるいは「近代」とは何か、という壮大な問いに答える一つの手掛かりとして、政治思想史の観点から、初期近代イングランドにおける「文明の作法」の系譜を究明しようとするものである。

序章で精緻に論じられているように、著者によれば、ヨーロッパにおける「文明」という言葉の理解には、ルネサンスから一八世紀までの初期近代までとそれ以降では、ある思想

史的な転換があるという。初期近代の人々は、「文明」を(近代以降に住まうわれわれがさも当然かのごとくそう考えるように) civilization として理解していたのではない。そうではなく、当時の人々は文明という語として civility を用いていたのである。

civility は、「野蛮」や「粗野」と対置される意味を有するが、それだけではない。人間の具体的な所作や振る舞いに大いにかかわるものであり、作法の洗練や礼儀正しさを意味するものである。「礼節」(courtesy)・「適正」(decorum)・「行儀のよき」(good-breeding)・「上品さ」(politeness)・「マナーズ」(manners) などという語と密接に関連し、必ずしも近代以降の civilization を経験しない他の文明にも適用可能な指標であった。本書では、これらの語彙などによって示される作法の総称を「文明の作法」と呼んでいる。重要なことにそれは、「自由」や「平等」といった抽象的原理ではなく、具体的な人間の生活世界に埋め込まれたものである。つまり、civility とは日々の人間の営為(社交)を支える文化資本やハビトゥスであり、他者との持続的な交際や共存を可能にする「型」(form) や「わざ」(art) であり、「実践知」(practical knowledge) なのである。

近代以前のヨーロッパにおいて、そうした civility は君主

の宮廷や文明社会を舞台として絶え間なく洗練され、再生産されていた。ここで著者は、初期近代イングランドを主な対象とし、(一)宮廷の政治学、(二)作法書の世界(三)、政治教育としての大陸旅行、(四)外交の作法、(五)文明化された共和国、(六)チェスターフィールドの「世界」、という六つの主題に基づいて、「文明の作法」の歴史的な展開を政治思想史の立場から論じている。

第一章では、「文明の作法」を涵養する「学校」であり、それを発信する場所としての「宮廷」の思想的な重要性が強調されている。さらに、ルネサンス期の宮廷社会を中心に育まれた「文明の作法」が、一八世紀になると、新たに「文明社会」(civil society)へと拡散・継承されたことが指摘される。

第二章では、「文明の作法」の伝搬と普及において「作法書」(courtesy book)が果たした役割が注目される。特にルネサンス期イングランドは辺境の後進国であったことから、一八世紀にいたるまで、イタリアやフランスの作法書が絶え間なく受容されていたのである。

しかしながら、「実践知」としての「文明の作法」は作法書を読むだけでは身に付かない。そこで、第三章で注目されるのが、「文明の作法」を理解し身につける過程としての「大陸

旅行」(grand tour)である。ヨーロッパの宮廷や都市を巡り、他者と交際する大陸旅行は、「文明の作法」の身体的な習得を目的とした政治エリート教育の総仕上げの過程だったのである。

第四章では、「文明の作法」が実践される場としての「外交」(negotiation)について考察されている。この時代の外交の舞台は宮廷社会であり、そこで展開された「文明の作法」は、他者と共存し、ヨーロッパの主権国家秩序を維持するために必要なツールだったのである。

第五章では、「文明の作法」と「共和主義」(republicanism)との相克が注目される。そのうえで、ハリントンの『オシアナ共和国』やヴェネツィア神話の再解釈がなされ、それらが君主国の「文明の作法」を新たに共和国に導入しようとする試みであった可能性が指摘される。

第六章では、チェスターフィールド伯の思想的な再評価が行われる。彼の『息子への手紙』は、初期近代ヨーロッパの宮廷を発信源とする「文明の作法」の系譜の一つの集大成として理解されうる。ところが彼は、多くの批判とともに、忘却されていくことになる。ここに著者は「文明」の転位を看取るのである。

終章で述べられているように、「文明」の転位とは、civility

として理解されていた文明から、civilizationへと向かう動きである。著者によればそれを暗示するのが一八世紀末ごろの「エチケット」(etiquette)という語の登場である。この語の登場は、civilityという語においては不可分であった「政治」と「社交」の分断を含意し、それによって、いわば「作法」という語彙をそぎ落としたものとして civilization という語句も同時期に登場してくるわけである。以降、「文明の作法」は後退し、剥き出しの暴力や感情、利益、イデオロギー、個人と大衆が前面に出てくるようになる。そうであれば、デモクラシーやナショナリズムへと向かう近代の思想史は単純な進歩の歴史ではなく、他者との共同生活を成立させる「文明の作法」の喪失という一つの大きな逆説と矛盾を内に抱えていた、と著者は論じる。

「文明の作法」の思想史は現代のデモクラシーやナショナリズムが、実は、それらを支える一つの文明が損なわれ、忘却される過程で新たに登場してきたことを、われわれに語り伝えてくれる、という著者の結論は極めて示唆的であり、本書は、「近代」や「文明」を考察する上で、必読の書だと言えよう。

(白川 俊介)